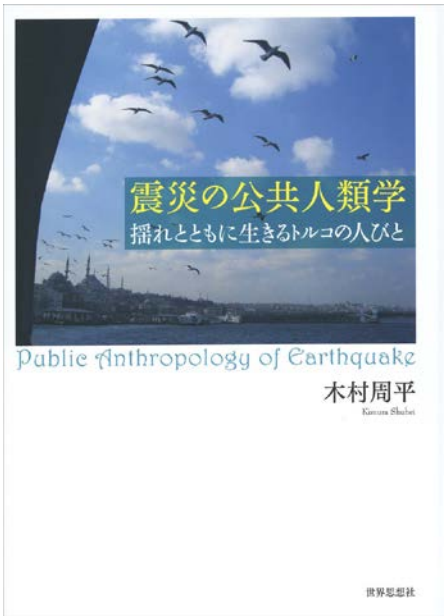
木村周平著『震災の公共人類学――揺れとともに生きるトルコの人びと――』、京都、世界思想社、2013 年、294 頁、4200 円+税

大橋　響



この本は、災害研究に対して人類学がどのように貢献できるのかという疑問に対して、「公共性」という立場から応答することを目的とするものである。その根底には、東日本大震災を通して、人類学者が復興に向けてどのように貢献できるのかを考えるようになった著者の強い思いがある。本書の舞台はトルコであるものの、著者は、この本の読者が本文中の事例を少なからず東日本大震災と重ね合わせることを想定した上で、日本とトルコのような災害が起こりやすい国に住む人々と、災害を人類学的に研究する人々をつなぐ役割を担いたいと述べている。参考までに述べておくと、現時点で著者はトルコから東日本大震災の被災地へとフィールドを移し、研究を行っている。

次に、評者が本書を批評するに至った背景を述べたい。評者は岩手県陸前高田市に住んでいた祖母や親族を東日本大震災で亡くしたことから、人類学的災害研究に関心を持つようになった。現在は、大規模災害を経験した人・地域がいかにして「日常」の状態へと戻っていくのかを研究しようとしている。複数の文献を読む中で、災害人類学に関する書籍の中でも代表的存在といえる本書に興味を抱くに至った。

手始めに、本書の類書との違いについて言及しておきたい。本書の大きな特徴の一つとして、災害という出来事そのものにテーマを設定していることが挙げられる。過去の災害に関する人類学的研究は、災害を契機として起こった地域の社会・文化的変化を記録する形式のものが主流であった。その多くが、人類学者が調査をしていた地域を偶然災害が襲ったことにより、その災害による影響を必然的に描くことになったケースである。無論、災害という出来事のインパクトはその地域にとって非常に大きいものであることがほとんどだが、あくまで災害は社会・文化の変化を起こすきっかけとして描かれるに留まる。他方、本書の主役は過去、そして未来の災害という現象であり、それに対して人々がどのような行動をとっているかを彼らの目線から明らかにするという点で特徴的であると言える。

以下、本書の構成について説明する。本書は、序論と結論を除いてⅢ部構成となっており、Ⅰ部が「記憶・忘却・情報」、Ⅱ部が「リスク・政策・時間」、Ⅲ部が「公共性・複数性・持続性」というタイトルがつけられている。Ⅰ部は第一章と第二章、Ⅱ部が第三章と第四章、Ⅲ部が第五章と第六章から成る。

序論では、過去に人類学の分野においてどのような災害研究が行われてきたかがまとめられる。著者によれば、主に 2000 年代に行われた人類学的災害研究においては、「災害や復興支援のような外部からの影響を受けて、被災したコミュニティがどのように変化するか、あるいは災害を契機にどのような新しい動きやネットワークが生み出されているのか」（p. 28）という点を中心に議論がなされてきた。それを受け、災害を「公共性」という視点から描くという本書の立場が示される。ここでいう「公共性」とは、著者の言葉を引用すると、「問題を、特定の人びとや集団、あるいは逆に国家制度や行政だけが対処するべきものとして固定するのではなく、地域社会、市民団体、行政などの社会内の多様なアクターが共有すること」（p. 11）である。多様なアクターとは、本書の内容と照らし合わせて考えると、トルコ政府、研究機関、ボランティア団体といった、災害に対して強く関与せざるを得ない人々を指していることが分かる。彼らがどのように関連性を築いているかを追うことによって、直接被災した人だけでなく、部外者を含めた様々な人同士をつなぎ、災害の記憶が忘れられるのを防ぐことを著者は目指している。

第一章「震災の記憶の共有」は、1999 年 8 月 17 日に発生したコジャエリ地震によって甚大な被害を受けたトルコ西部コジャエリ県ギョルジュク市にある、地震の記念碑についての言及から話が始まる。この記念碑には、「忘れない」という主語の明示されないメッセージが残されているという指摘を足掛かりに、災害の記憶は特定の人だけではなく、災害を経験していない人も含む多様な立場の人々によって共有され、受け継がれていくべきものであるという著者の主張が展開される。

第二章「地震情報の生産と流通」では、全ての出来事はアッラーの意思によって起こるというイスラームの観点から、地震を運命論的視点から捉えるトルコ特有の災害観について言及される。また、トルコでは以前から地震に関して科学対運命論、もしくは科学対イスラームという対立軸で議論がなされており、特に科学者は地震を神の定めだと考える運命論者を批判してきたことが説明される。そのような二項対立的な考えが広がっている中で、「いくら科学的に地震に向き合っても、完全な対策をすることは不可能であり、科学的な地震対策をして、それでも被害を受けてしまったらそれは運命によるもの」と考える一般人の語りが紹介される。その上で筆者は、運命論と科学的知識を二項対立的に捉えたり、非科学的な知識を排除したりするのではなく、双方の知識を総合的に捉えていくことが必要であると指摘する。

第三章「地震をめぐる国家政策、科学、社会の歴史的絡まり」では、トルコ政府による防災政策について言及される。本来であれば、トルコ特有のトップダウン型の政治のあり方から、トルコの防災対策は政府中心で行われるものであると認識されていた。しかし、1999 年に発生した地震に対する政府の対策は充分とは言えず、皮肉にもその不充分さによって生まれた「空白」が、市民ボランティアをはじめとした様々な立場にある人々の登場を招いたと指摘される。

第四章「耐震都市計画プロジェクトをめぐって」では、実際にイスタンブールで行われた耐震都市計画プロジェクトの一部始終を概観している。プロジェクトが「都市計画(権力)対住民」という二項対立的な議論の中で進められるのではなく、日本人プランナーや建築関係の民間企業など様々なアクターによる影響を受けながら、進退を繰り返しつつも展開

する様子が順を追って描かれている。

第五章「災間期の「ボランティア」」では、イスタンブールのカドキョイ区を事例に、災害と災害の間、すなわち「災間期」におけるボランティア不足の問題が取り上げられている。災間期のボランティアが減少する中でその持続性を保つためには、「自発性」と「強制性」のはざまにあるボランティアの立場を理解した上で、ボランティアと彼らを管理する側の人々との間に相互的な関係を創り出すことが必要であるというのが筆者の主張である。

第六章「防災の公共性に向けて」では、トルコの最小行政単位であるマハレごとに設立された、災害における救急救助活動を行うためのプロジェクトである MAG（マハレ国際ボランティア）の活動を分析している。MAG は、その独自性を担保する規律を厳しくすれば市民がボランティア活動から離れてしまい、行政に近づきすぎるとその中に取り込まれてしまうという不安定な立ち位置にあることから、市民・行政どちらの立場にも属さない「どっちつかず」の立場を維持しており、それが要因となって防災における「公共性」が維持されているという。

ここまで、本書の内容を簡単に振り返った。それを踏まえ以下では、本書の優れた点、課題と思われる点について論じていきたい。

本書を読むと、冒頭から末尾まで、災害に対して貢献したいという筆者の切実な思いが溢れ出ていることに気付く。災害という、人々にとって大きなトラウマになりやすいデリケートな話題を扱っているのにもかかわらず、調査対象の思いを真摯に抽出し、議論している。その過程で著者は決して感情的に議論を進めることはないが、一方で出来る限り対象者の思いに寄り添うという絶妙な感覚を一貫して保持し続けている点は、評価に値すると評者は考える。

一方、評者が最も強い違和感を抱いたのが、本書のメインテーマである「公共性」という言葉が意味する事柄の範囲である。一般的に「公共性」という言葉は、公共施設や公共サービスといった言葉から分かるように、制限を設けることなくあらゆる人々がアクセスできると言った意味を持つ。本書においても、上述したように政府、研究機関、ボランティア団体といった複数のアクターが取り上げられていることから、一般的なタームの「公共性」が示すように、あらゆる立場の人々の考え方を拾っているように見えるかも知れない。しかし実際は、本書に登場する人々のほとんどが、「災害という問題に対して常日頃から意欲的に行動している（しなければならない）」人々であり、それは見方を変えれば、偏った立場の人々しか扱っていないとも言える。このことから、本書は「公共性」を謳いつつも、実際は排他的な性格が強いのではないか、というのが評者の疑問である。以下、本文中の事例と照らし合わせながら具体的に説明したい。

第五章では、災害ボランティアと彼らを管理する側との「相互的な関係」が言及される。「相互的」であると言う以上、ボランティア側と管理側の両者の視点が同等に組み込まれる必要があると考えられるが、本章では管理者側の視点に偏っている印象がある。本章において、地震発生から時間が経つにつれてボランティアが減っていくことに対する問題意識は丁寧に描かれている。その一方で、ボランティアがいかに自らのタスクと向き合い、なぜ辞めるという選択をしたのかといった、ボランティア側から見た防災のあり方は十分に言及されていない。このことから、ボランティアに参加しないという選択をした彼らが、著者の言う「公共性」に組み込まれていないように感じられるのである。ボランティアを

辞めてしまうことと、未来の災害に無関心であることを直接結びつけることは必ずしも適切とは言えない。彼らなりに、ボランティア以外の最善の方法で災害と向き合っている可能性もあるためである。それにもかかわらず、常に災害に関心を持たない人を切り捨ててしまうとも取れる筆者の姿勢は、本当に「公共性」を帯びているだろうか。管理者だけでなく、実際のボランティア経験者にも話を聞くことができれば、より「相互的」な関係のあり方が浮き彫りにすることが出来たであろう。

また、「（災害に対して）人類学者のできることはまず、書くことである。忘却に抗して書くこと、あるいは、現実を作り上げるため、生をつないでいくために書くこと」(p. 263)、「1999 年の災害から時間が経過するにつれ、理論上は「近い将来に起きるとされる地震」が近づいてくるのにもかかわらず、人びとや諸機関の関心も資源もこの地震から離れていく」(p. 257）といった記述から、著者は災害が「忘れられる」ということに対して強い危機感を抱いていることが分かる。それに抗する手段として、現地の状況を長期的に観察する人類学的な記述が有効であるというのが著者の主張である。

しかし見方を変えれば、人々が災害に関する記憶を「忘れていく」ということは至って普通の動きであり、その行為自体を問題視することが適切とは言いづらい側面もある。評者は 2011 年以降、被災者の親族という立場から東日本大震災と向き合い、陸前高田市に毎年足を運んできた。その中で感じたのは、人々は生活の全てが津波によって影響を受けていた状態から、少しずつ「津波だけではない、そしていつまでも被災者ではない生活」を取り戻そうとしているということである。

東日本大震災が非常に衝撃的な出来事であったことから、東北地方と聞くと無意識にあらゆることを震災と結びつけてしまう感覚は、日本人や日本事情に明るい人なら誰しも一度は抱いたことがあるだろう。しかし、実際に現地で生活する人々の様子を見ると、災害に影響された生活をいつまでも送り続けるわけにはいかない。次第に一見「普通」の生活を送るようになるのが自然の流れであり、同時に本当に望まれていることでもある。それは災害を「忘却」した訳では決してなく、時間をかけて、「普通」の生活を通じて災害の体験を消化し続けているのである。その状態を見て研究者が「災害を忘れた」と判断した場合、現地の人々を「災害」という一定の枠の中に押し込めてしまう可能性がある。著者の主張に従うならば、災害を研究する人類学者は、「津波で壊滅した都市」から「ある地方の地方都市」へと変化していく陸前高田市を、あくまで津波で壊滅した町という視点からしか観察しないということになる。津波により街全体が壊滅したこと自体は揺るぎない事実だが、同時に津波だけが陸前高田市を形成する要素ではないことを考えると、それは非常に偏った見方であると言える。

以上は人類学者というより、災害で親戚を亡くし、幼少時から毎年訪れていた土地が壊滅するのを間接的にとはいえ体験した評者の感覚に過ぎない。しかし、「公共性」という間口の広そうな概念を提示するのであれば、災害という出来事に常日頃取り組んでいる訳ではない人々の視点も入れる必要がある。筆者の言う「公共性」の理論を陸前高田市や他の東北の被災地に当てはめて考えた場合、その範疇に入れるのは、復興に関わる行政関係者や災害関連の NGO のみであろう。その他大勢の一般市民は、「公共性」の周縁へと追いやられてしまう訳であるが、その状態で、被災者の目線から見た災害を適切に描くことは困

難であろう。

結論の章で、「東日本大震災の後、私は人類学に何ができるのかという問いに直面し、大きな無力感に苛まれた」（p. 262）という気持ちが綴られていることから、著者が災害という出来事を最も重要な問題と捉え、それに貢献するべく使命感を感じていることが見て取れる。しかし、トルコであれ、現在著者が調査を行っている日本の東北地方であれ、著者の災害に対する意識と住民のそれとが必ずしも一致するとは限らない。災害の重要性を固定した状態でフィールドに入るのではなく、まずは住民のありのままの意識、言い換えれば住民にとっての日常生活における災害の位置づけを捉えようとする姿勢が、人類学という手法を最大限生かした災害研究へとつながると評者は考える。

尤も、災害人類学は未だに体系化が充分されていない学問であることから、本書から学び取れる点は多くある。そういった意味では、災害研究の草分け的な存在として、本書の価値は揺るぎないものであろう。